

「高校魅力化」 って何ですか？ 岩本悠さんに 聞いてみました



高校魅力化プロデューサー
岩本 悠

「魅力化」ってどうするんですか？

「中学生が、この高校に行きたいって思う。保護者の皆さんも通わせたいって思う。そして地域の人たちから見ても、この学校は地域にとって大事なものだから活かしたい、大切に守っていききたいって思う。そういう、人々の想いをひきつける学校にしていこうっていうのが高校の『魅力化』です。平成20年頃、生徒数の激減で高校存続も危ぶまれる状況に陥りましたが、本来の魅力を磨いて伝えていくことで、生徒も集まり、学校にも活力が満ち、潰れずに残っていけるだろう。そうした考えに基づいて、島前高校魅力化プロジェクトが始まりました。」

当初の具体的な目標は？

「プロジェクト発足当時のシミュレーションでは、現状だと平成25年度には学校の統廃合基準の生徒数を下回るというシナリオが見えたので、最初はとにかく学校が潰れるのを防ぐことが最優先でした。そのために、地元からの進学率を高め、島外からの生徒を確保して、『学級数を2クラスに戻すこと』を当面の目標に据えてやってきました。」

今年度、教員数が急に増えたのはなぜ？それも「魅力化」？

「今の日本の公立高校の教員数は、いわゆる標準法で算定されます。学校の規模、学級数がこれくらいの学校だったら教員何人、というのを算出する式がある。しかし島前高校のような離島の小規模校になると、その法律をもとに算定すると極端に少なくなります。」

結局、その法律自体が昭和36年にできた古いものなので、当時子どもがどんどん増えているという状況の中で、国の考え方としては、全国一律の高校教育を網羅的に配置しよう

としていた。

ところが今の状況は逆で、子どもはどんどん減り、しかも離島となると本土のような統廃合もしくしく、全国一律の規模の学校を作れるはずもない。つまりその法律は、地理的な条件が一切加味されていなかったわけです。全国これだけ地理的な多様性がある中で、それは絶対におかしい。離島という特殊な環境の小規模校でも適正な教育が受けられる形に法律を改正してほしい、という要望を、島前から国に訴えてきました。

さらに、このような法律の背景にある考え方、教育格差の裏には経済格差がある現状など、さまざまな社会問題も見えてきた。島前のためだけではない、他の離島、そして日本全体のためにも、時代に合ったより良い形にこの法律を変えたほうがいい。僕はそう確信して、島前高から声を上げ続けました。議員さんなど多くの方の協力を得てその声が国に届き、法改正に至って教員が増えました。『魅力化』の流れの中で大きなステップです。」

狼煙を上げる高校、とてつのない歴史があるんですよ！

「島前高はもともと隠岐高の分校で、昔の法律では分校は定時制と決まっていたんですが、全日制を求め地域の人々の強い思いが県へ、国へと伝わり、法律が変わって分校として初めて全日制になった。それにより全国の他の分校もどんどん全日制に変わっていったんです。こんな成り立ちの島前高が、いま半世紀を経て、同じように国の法律に果敢に挑み、他の離島に希望を与えている。」

文部科学省の担当者の方も、この法律の改正は実はすごい意味を持っていると言っていました。『地域』というものがまったく考慮されていなかった法律、しかも学校教育の根幹を成す法律の中に、島前からの働きかけによって、初めて『地域の独自性』という視点が入った。これは日本にとっても画期的な転換点なんだと。」

生徒はどつ変わった？

「例えば地域学といった独自の授業などで、地域を考える視点ができてきた。島前の問題を自分ごととしてとらえられるようになり、将来自分は何らかの形で自分達の島に恩返ししたいということをお仕着せではない自分の言葉で言えるようになってきました。進路を考えるときにも、自分がやりたいことだけではなくて、第一次産業をこうしていきたいとか、地域の課題を自分の活動によって解決していきたい、島前の魅力をもっと外にも伝えていきたい、ということを考える生徒が増えてきましたね。」

島留学の生徒が増えたことでも、生徒達は変わりました。地元育ちの子、島外から来た子、最初は溝がありました。多様な価値観のぶつかり合いの中で協力しあっていくことを体験から学ぶ。良い意味での刺激が多いので、学校自体に活力も生まれています。

しかし、ただ島外からたくさん生徒が来ればいいというものではない。

い。目的意識・意欲を備え、地元生徒へのよき刺激となる生徒が来るような島留学を目指していきます。

今の設備や教職員数などの条件を考えて最適な教育環境を実現できるのは、1学年50人程度だと考えています。全体の数をこれ以上無理に増やすつもりはありません。地元の生徒は今後も減少傾向なので、地元からの島前高志願率を現在の70%から80%に引き上げるのが目標。島前の子は全員来てもらいたいです。そのためにも、『魅力化』の取り組みはまだまだこれからですね。」

もっと聞きたい
「高校魅力化」
ここがスゴイ！



島前高校校長
西藤校長先生

県立高校は地元の小・中学校と比べて地域への根ざし方が薄くなりがちですが、島前高は違う。この島の発展の一翼を担おうとしている。これは全国でも先駆的なことで、生徒たちの自信や誇りにつながると思います。今年度から教員数が9名も増えましたが、教員増のメリットの第一は、授業の質が上がったことです。第二が、部活動の充実。部員数と顧問が確保できたことで軟式野球と女子バスケットが復活しました。第三は、教員にも若さと活気がガンと増したことです。でも校内だけのことではだめ。「生徒だけでなく先生方ももっと地域へ出ましょう！」とハッパをかけているところです。

行政や保護者など色んな立場の人が協議するスタイルが良かったと思います。だいたい、標準法を変えるために嘆願しようだなんて、教員の発想を超えていますからね。常識にとらわれず、本質をついた解決策のアイデアを出す。すごいと思いますよ。

本土の高校の方がいいという思い込みを取り去るのは非常に難しい。だから魅力化の取り組みについて何度も説明するのはすごく大事。



島前高の先生方は中学校へ来て、実際にやっていることをきちんと説明する。こういう努力をしている学校は、県内でもなかなか無いです。

海士中学校教頭 東教頭先生

島前高2年、ヒトツナギ部長の仲島大揮くん



中学生の時にヒトツナギの発表を見て、この島にそんな価値があるんだって感動した。今、部員9人のうち6人が寮生で、海士に無いものや自分が知らない本土の話色々聞けてとても面白い。部活をしながら、見聞が広がってます。

教育と地域活性の好循環を

「軌道に乗り始めた高校魅力化プロジェクト。しかし、少人数指導のさらなる充実や、寮の増築といった環境整備など、課題は多くあります。」

岩本さん曰く、『魅力化』の今後の方向性として最も大切なことは、学校と地域が一緒になって頑張ること。

「島外生が地域とつながりやすくするために、『島親』の仕組み作りがまず大切。そして、教育の縦のつながりを意識して、島前の保育園から小・中学校との連携を進める。さらに地域の方も授業や行事に参加できるようにするなど、生徒と住民の学びあいの体制を作る。島前ならではの『地域総がかりの教育』を実現したい」

島前地域が目指す『人づくりからまちづくり』とは、高校の魅力化を始めとする島ぐるみの教育を地域全体の活力アップにつなげることで持続可能な島をつくりあげていこう、という考え方です。

学校を考えることは、島の未来を考えること。住民の皆さんそれぞれの接点、それぞれの関わり方で、島前高への応援を、どうぞよろしくお願いいたします。」